

1. ふじの仕上げ摘果について

● 実施時期

満開後 60 日頃までに実施（7/10 頃までに完了したい）

● ふじ適正着果基準

- 1 果実に必要な葉枚数：60～75 枚（葉っぱ = $8 \times 8 = 64$ 枚…か？）
- 4～5 頂芽に 1 果が基本
- 結果枝 30cm に 1 果配置を目安。（面積が多い・他品目と作業が競合する場合は 50 cm に 1 果配置でもよい）
- 品毎に必要な葉枚数や着果基準が異なる（下表参照）

品 種	必要葉枚数	着果基準
つがる、シナノスイート	45～60枚	3～4頂芽に1個
シナノゴールド、秋映	60枚	4頂芽に1個
ふじ	60～75枚	4～5頂芽に1個

*1頂芽15枚と計算（徒長枝の葉は数えないこと！）

● 仕上げ摘果を行う順序

- ① 面積・樹齢・樹勢（弱いものは早く）・結実量や凍霜害の程度等によって変わる

目安：秋映・王林 → スイート・ゴールド → つがる → ふじの順序で進める。

- ② ふじは早期に摘花又は予備摘果を行い、仕上げ摘果は7月上旬頃実施することで省力化と肥大促進が図られる。

● 仕上げ摘果で落とす果実（次頁図1参照）

- ① 障害果（変形果、キズ、サビ、病虫害）

⇒ 変形果、果面のサビがひどい果実、病虫害の被害を受けている果実

- ② 生育が不良な小玉果

⇒ 種入りの悪い果実は小玉になる可能性が大

- ③ 日焼けや逆さ実になりそうな果実

⇒ 年中直射日光が当たっているところへ着果している果実はなるべく除去する

- ④ 果台の異常に長い（2 cm以上）所へ着果している果実

⇒ 現状は大玉であることが多いが、収穫時に青玉果（光玉）になりやすい

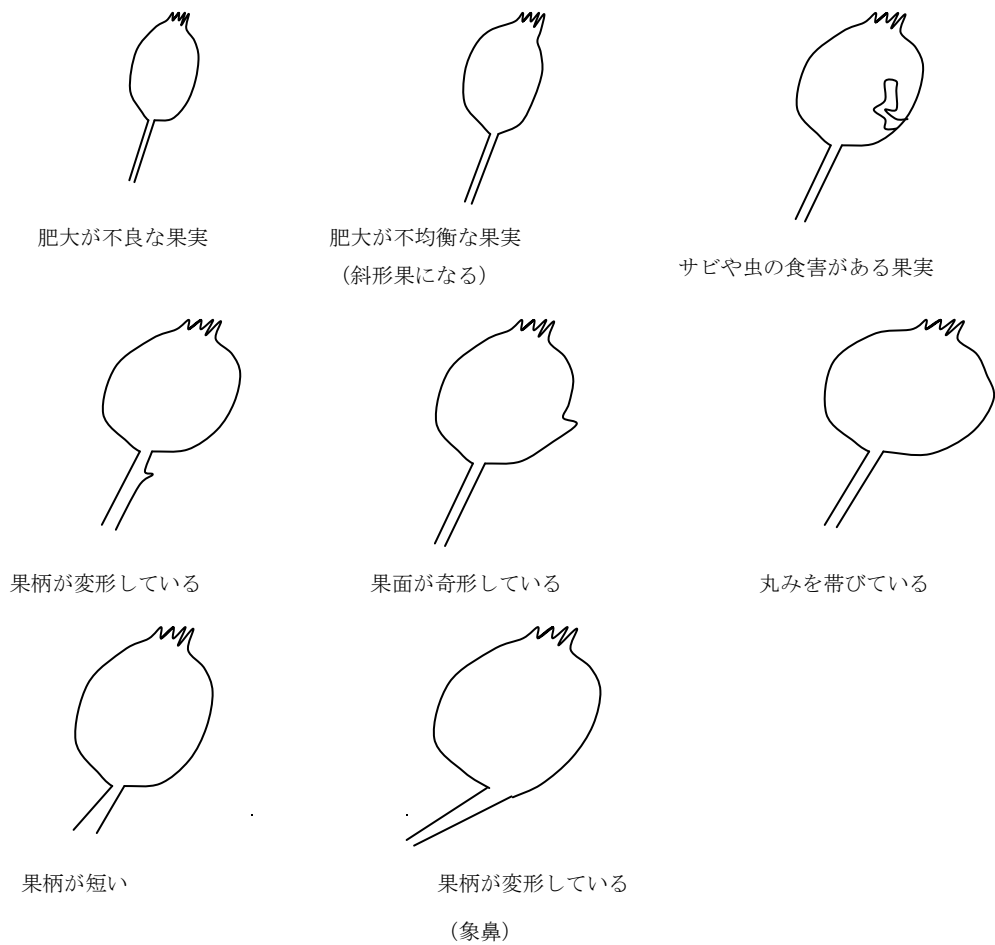


図1 仕上げ摘果で除去したい果実



← 青玉果（光玉）除去対策（左写真参照）

果台が異常に長いもの（2 cm以上）が今年も目立ちます。この部分に結実した果実は、今現在大きくとも、収穫時に青玉（光玉）になる可能性が高いので仕上げ時にできるだけ除去してください。

● 仕上げ摘果のポイント

- ① 若木の骨格枝育成や伸ばしたい枝の先端部には着果させない。
- ② 日焼け果になりやすい位置の果実はできるだけ落とす。一年中、日当たりの良すぎる果実より、多少葉陰になる果実が好ましい。（強日照により日焼け果が発生中）
- ③ 日当たりの良い枝と悪い枝では着果量を加減する。日当たりの良い枝は多めにつける。
- ④ 樹勢によっても着果量を加減する。弱い樹は少なく、強い樹は多めにつける。
- ⑤ 同じ側枝内なら、良い果実が一部に偏っていても良い。休ませる枝も作ることも必要。
- ⑥ 肥大しても枝にあたらず傷がつかない果実。収穫時には縦横10cm弱は肥大することを考慮する。
- ⑦ 太い結果枝より落ち着いた枝（果台を何回も通ったもの）で細い結果枝の果実。（図2参照）
- ⑧ 生姜芽になると肥大が悪くなるので、適宜発育枝を確保し、樹勢を維持する。
- ⑨ ふじは、摘果時が濃緑の果実は地色が抜けにくい果実となりやすい。（窒素過多）
- ⑩ ふじは、果台が2cm以上の長いところへ結実した果実はできるだけ除去する。

果台と果台枝に注目
果台枝がいつまでも伸長している果実は、摘果時にいくら大きくても良い果実にはなりにくい。生育が進むにつれ肥大が止まり、逆に小玉で地色が抜けにくい果実になりやすい。

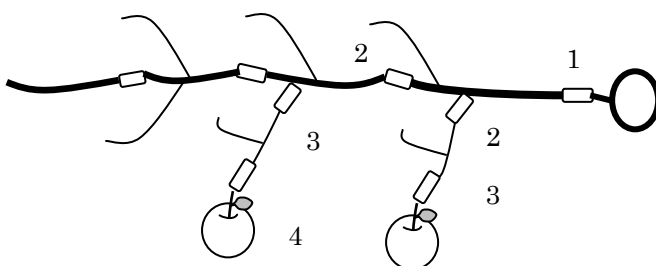


図2 着果させたい結果枝

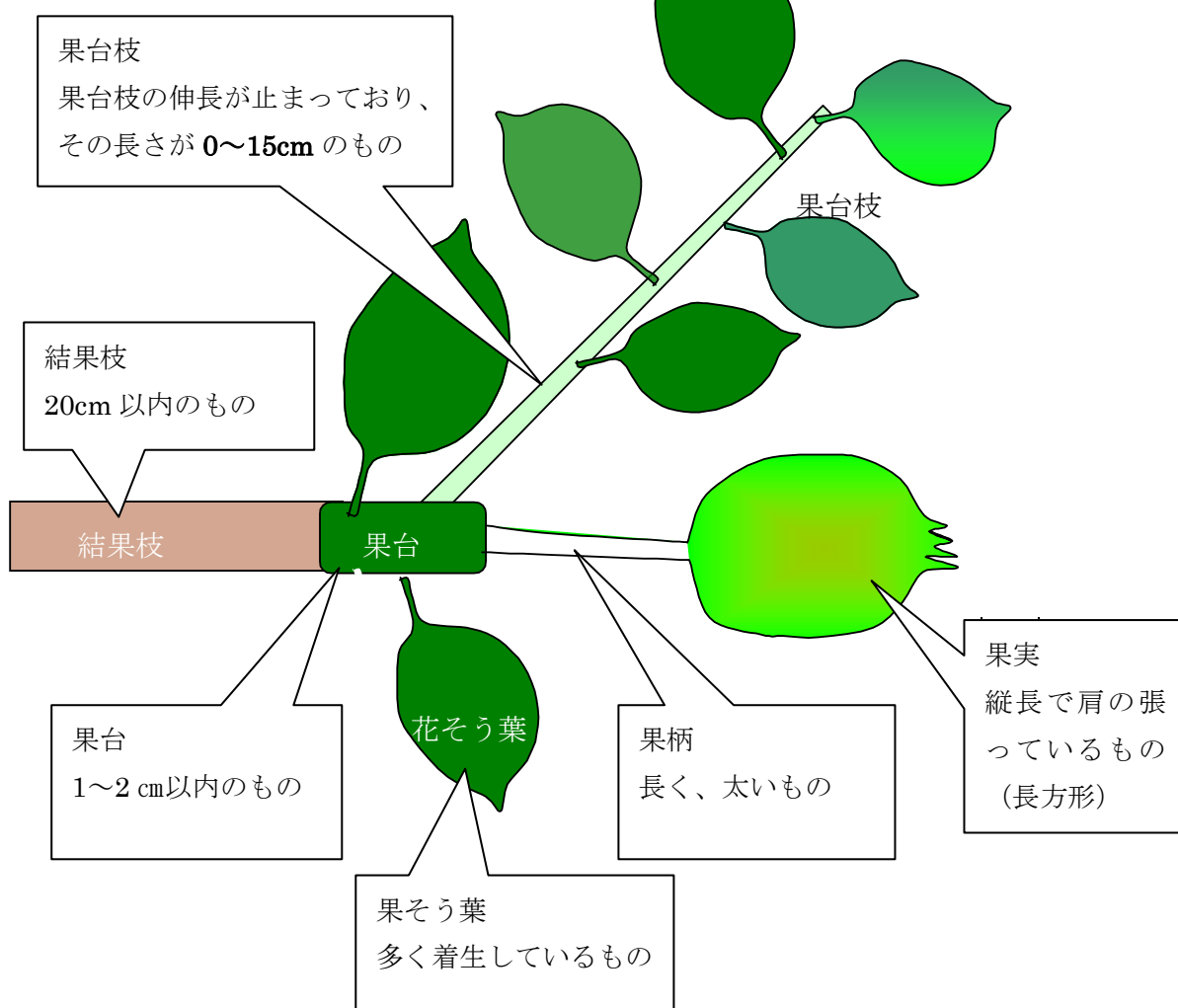


図3 りんごの名称と”ふじ”の摘果注意点

2. 中生種（秋映・スイート・ゴールド）の仕上げ摘果のポイント

◆ 秋 映（千秋×つがる）

- ① 側花（果）はつるサビの発生が多い ⇒ 中心花を残す
- ② 開花が早いものほどサビの発生少ない ⇒ 開花が遅い花は花そう毎摘み取る
- ③ 早期の着果制限は、サビの発生が少なくなる ⇒ 摘花
- ④ 仕上げ摘果は、サビの程度が判別できる満開 6 週間位から始める
- ⑤ がくだちから 1 ヶ月以内は果実に触れないこと（サビの発生）
- ⑥ 果実が垂れ下がる様になると、サビ果の発生が少なくなる
- ⑦ 果形のバラツキが大きいので、素性を良く見て摘果する

◆ シナノスイート（ふじ×つがる）

- ① 早期のあら摘果（満開～満開後 3 週間）は、心カビ病の発生が多くなる
⇒ 満開後 3～4 週間に予備摘果・・・樹勢が弱い場合は早期に着果制限する！
- ② 側果はつるサビが発生しやすい ⇒ 中心果を残す
- ③ 指で摘果すると、花そう毎とれてしまう場合がある
- ④ 予備摘果が満開 3～4 週間後、仕上げは早く実施する。
- ⑤ 果実に縦筋が入る場合があるので注意する
- ⑥ 着果過多は隔年結果となりやすい
- ⑦ 肥大が良すぎる場合は、基準よりやや多目の 3～4 頂芽に着果させ肥大を抑える
- ⑧ 肥大が良すぎる果実は着色が劣る

◆ シナノゴールド（デリシャス×千秋）

- ① 側果はつるサビが発生しやすい ⇒ 中心果を残す
- ② 樹勢が落ち着くと花芽着生が良好 ⇒ 摘果に時間がかかる
- ③ 開花のバラツキ、果形のバラツキが大きい
- ④ 幼果時の果形が悪い（果頂部に段差がある）果実は、できるだけ摘果する
- ⑤ 着果過多は、糖度が低く、収穫期も遅れる傾向がある。また、隔年結果の要因となる。
- ⑥ 仕上げ摘果時で 3～4 頂芽とし、その後の肥大に応じて 4～5 頂芽に修正する
- ⑦ 遅れ花に結実した果実は摘果する

品 種	摘 花		あら摘果	仕上げ摘果	備 考
	腋芽花	側 花			
秋映	花摘み	一輪摘花	—	サビの発生が確認できる満開後6週間に降から実施	一輪摘花はサビの発生が軽減する
シナノスイート	花摘み	×	満開後3～4週間の間	満開後60日以内に実施	あら摘果が早いと心カビ病の発生が多くなるので、摘果時期注意
シナノゴールド	花摘み	満開後30日以内までに一輪摘花(摘果)		満開後60日以内に実施	着果が多いので順次摘花(摘果)を進める

表 1 中生種の摘果のポイント

3. 夏季管理について

花芽分化期（7月～8月）を迎える前に夏季管理を徹底することは、充実した花芽の形成促進や病虫害防除効果を高める重要手段です。毎年ふじの花芽不充実が問題となっています。翌年、使う花芽にはこの時期にしっかりと日光を当ててください。充実した花芽を形成することができれば、翌年の収穫量確保や高品質果実生産につながります！すでに30年度の生産は始まっています。

● 夏季管理のねらい

- ① 樹冠全体にむらなく日光の透過をはかり、葉の働きを盛んにし、果実品質の向上と花芽分化発達を良好にする。
- ② 薬剤散布の到達、付着を良くし、病虫害防除効果を高める。
- ③ 枝の配置を矯正し、枝の裂傷、折損の防止、樹形の維持確立をはかる。
- ④ 冬季の剪定時と違い、繁茂状態で園全体の日当たり状況が良く把握できる。日光を大きく遮る枝を見つけやすい。

● 徒長枝切りのポイント

- ① 実施時期：6～7月（ふじは、9～10月の着色管理の時期にも実施する）
- ② 全ての徒長枝をきれいにせん除するのではなく、幹の日焼け防止や葉枚数の確保も考慮して、30cmに1本程度は配置する。
- ③ 6月は、徒長枝の生育が盛んで、花芽分化期を控え、日照が必要となる。また、主要病虫害の防除適期となるので、徒長枝のみならず、中小枝でも日照、薬液の到達を妨げているものはせん除する。
- ④ ふじの着色期前の（9～10月）の徒長枝切りは、日照が良く当たることを考えて行う。
- ⑤ 主枝・亜主枝等の骨格枝では、全ての徒長枝を切り落とすと日焼けをおこしやすいので細い枝を少し残す。
- ⑥ 結果部が外部に出て、樹冠内にはげ上がりがみられる樹では、誘引により徒長枝を利用して結実部を確保する。

● 誘引のポイント

- ① 実施時期：誘引は常時実施可能であるが、花芽形成促進を目的としているので、春先から6月末に実施する。
- ② 太くなりすぎて誘因が困難になった枝は、誘引する反対側に鋸目を入れたり、木質部を縦にえぐり取る等の方法で行う。（念枝）
- ③ 樹勢が強く、立ち過ぎる若木は、冬季の剪定を軽くして、誘引に重点を置くようにすると結実促進に有効である。（高接ぎ樹2～3年も同様に実施する）

● 日焼け防止対策

- ① 近年、増加している日焼け症状は、午後の直射光線が背に当たる北～東方向に伸長した枝に多い。枝の太さでは細い枝に発生が少なく、太い枝ほど多い。日焼け障害は、樹温が最も高まる8月に発生が多いため、とくにこの時期に防止対策が必要である。
- ② 多発しやすい枝の部分に、直射光を防ぐため、大きな日陰を作らない程度の小さな返し枝を配置するか、徒長枝を残して覆うようにする。
- ③ 高接ぎ更新樹では露出する太枝が多いので、早めに白塗剤を枝の背面を重点に十分塗布する。
- ④ 夏季の土壌乾燥を防ぐようにし、樹勢が低下しないようにする。早めの敷きワラが効果的である。（盛夏期の高温・干ばつの時は効果的拔群）

4. ダニ類対策及び梅雨期間の薬剤散布について

1. 殺ダニ剤散布時の注意点

薬剤散布と並行して粗皮削りや下草刈り等耕種的防除も含めた総合的な対策が必要です。また、殺ダニ剤を散布しても、薬液が園全体に到達しないと効果を発現しません。

- ① 樹幹内部まで十分に薬剤が到達するように殺ダニ剤散布前には徒長枝切りや枝つりを敢行する。
- ② 殺ダニ剤の効果を高めるため、散布 3～4 日前には下草除草を行う。
- ③ 散布死角がないよう散布量は多めに設定する。(10 a 当り 500 ㍓以上)
- ④ 殺ダニ剤は抵抗性出現を考慮して、同一薬剤及び同一系統は年 1 回だけの使用とする。

2. 殺ダニ剤の選択について

① 早期抑制対策

6 月下旬の定期散布に、殺卵・殺幼虫効果があり、中期的な抑制対策が可能なダニゲッターフロアブル 2,000 倍を使用する。(代替え薬剤：カネマイトフロアブル 1,000 倍)

② 殺ダニ剤ローテーションについて (H28)

6 月下旬 (6/20～25)：ダニゲッターF (初期密度低下) ⇒ 7 月下旬 (7/20～25 頃) スターマイトフロアブル (成虫に速効的效果) ⇒ 8 月下旬 (8/20～25 頃)：コロマイト乳剤 (成虫に速効的效果・残効短い)

- ③ ダニゲッター(ダニサラバ)は成虫に対してやや遅効的效果を示す。散布 7 日後以降に効果が発現。
- ④ ダニサラバとスターマイトは同一薬剤系統。抵抗性回避のため、どちらか年 1 回のみ使用とする。
- ⑤ バイスロイド EW 等の合成ピレスロイド剤は、殺ダニ登録はあるが効果はほとんどないので、盛夏期のシンクイムシ類対策として使用する。(合成ピレスロイド剤は年 2 回の使用としたい)

3. 7 月上旬 (梅雨後半) の定期薬剤散布について

散布時期： 7 月 5 日～20 日 (前回より 15 日後)

散布薬剤： 水 1 0 0 ㍓

展着剤 1 0 ml *注意事項①参照

バイスロイドEW 5 0 ml (7 日前、4 回)

ナリアWDG 5 0 g (前日、3 回) *注意事項③参照

対象病害虫：輪紋病・炭疽病・褐斑病・斑点落葉病

ハダニ類・シンクイムシ類・ハマキムシ類・キンモンホソガ他

10 アール当り散布量： 600 ㍓

注意事項 *良くお読みください。

- ① 輪紋病対策として、ic ボルドー412 の 33 倍を 6 月末～7 月初旬に特別散布しても良い。
- ② 褐斑病が心配される場合は、トップジンM水和剤 1,500 (前日、6 回) を加用する。
- ③ ナリアWDGはピオーネ等に薬害を生じる恐れがあるので飛散しないようにする。